

平成 25 年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

生徒が自律しまた安心して暮らすことのできる学校づくりと、社会で自立し社会に貢献できる人材の育成

2 中期的目標

1 セーフティーネットの高校として、外部から見てわかりやすいコンセプトをもった学校

(1) 生徒が自律し安心して暮らすことのできる学校づくり

- ア 個々の生徒に応じたきめ細かな指導
- ・新学年当初早期の全生徒・保護者面談
 - ＊5月中旬までの全生徒面談 100%完了目標(長期欠席者は家庭訪問)とし(平成 24 年度 4 月末までで 90%)、それを維持する。5 月中旬までに保護者面談 90%目標(来校不能の保護者は家庭訪問)とし(平成 24 年度は 75%)、26 年度 96%にし、それを維持する。
 - ・新入生に関する出身中学校との早期の連携強化
 - ＊5 月末までの出身中学訪問 100%達成し(平成 24 年度は 4 月末で 85%、8 月末で 100%)、それを維持する。
 - ・教育相談機能の充実（個別「サポートチーム」の充実）
 - ＊サポートチームの充実等による、配慮を要する生徒に対する柔軟な成績評価(平成 24 年度は 3 名)を平成 25 年度は 4 名以上に対して行い、それを維持する。
 - ・障がいのある生徒について可能な限りの支援を組織的に行う。
 - ＊障がいのある生徒・保護者の間取りによる支援に関する満足度を平成 25 年度 90%とし、それを維持する。
 - ＊保護者対象学校教育自己診断で、学校に対する満足度（平成 24 年度 90.3%、但し、「わからない」を母数から除す）を毎年 1 %以上上昇させ、平成 27 年度には 94%にする。
 - イ いかなるいじめも決して許さない・見逃さない指導と、毅然としたかつ生徒の実態に即した生徒指導
 - ・厳格で公平な生徒指導の一層の充実とともに、生徒の実態に即した生徒指導内規緩和と運用上の緩和を図る。
 - ＊懲戒人数(平成 24 年度は前年度より 17.7%減少)及び総停学日数を平成 25 年度は 40%減少させ、26 年度以後毎年前年度比 5 %減をめざす。
 - ・不登校・いじめられ経験をもつ生徒が登校改善できるよう図る。
 - ＊新入生の登校改善(平成 24 年度入学生は、不登校・いじめられ経験をもつ者のうち 84%が改善)を継続する。

＊生徒対象学校教育自己診断で、学校に対する満足度(平成 24 年度 60.7%)を平成 25 年度 65%とし、平成 27 年度に 75%にする。

ウ 部活動の活性化

- ・入部を促す取組みの継続と強化
- ＊部活動加入率（平成 24 年度 51%）を平成 25 年度 55%とし、平成 27 年度には 63%にする。
- ・重点部活動の強化
 - ＊写真芸術部の全国大会レベルコンクール優勝回数(平成 24 年度 3 回)を維持する。また、工学研究部の製作取組み(平成 24 年度 3 種類)を平成 25 年度以降も維持する。ダンス部発表回数(平成 23 年度は 8 回)を毎年 1 回以上増やし、平成 26 年度 10 回にし、それを維持する。ダンス部・工学研究部の学校説明会での紹介・発表を維持する(平成 24 年度 4 回)。
- ・耐震工事による運動部の衰退防止のため、グラウンド使用部活動の学校外での活動を保障できるよう、自助努力に努める。
- ・国際交流同好会の部昇格。および交流プロジェクトを新たに組織し、同プロジェクトを中心に、姉妹校である韓国セヒョン高校とのインターネット会議等の交流を行う。
 - ＊インターネット会議等による交流を平成 25 年度は 2 回、26 年度以降は加えて相互派遣 1 回以上実施

エ 校内環境整備

- ・区役所、地域住民・地域の小・中学校等の協力を得ながら緑化推進を行なうとともに、老朽化施設設備の整備を求めていく。

＊中退率を毎年 1 %以上減少させる(平成 24 年度は前年度より約 1.5%減少)。

2 生徒が将来に展望をもてる教育を進める学校

(1) 学力の充実と希望進路の実現

- ア 基礎基本の定着
- ・平成 24 年度に 1 年生「産業社会と人間」を活用して初めて行なった取組みである「学び直し」指導を平成 25 年度新入生でも継続するとともに、2 年生での継続的な取組みと他の教科への拡大を図る。また、月～金の「早朝学習」を 1 年生希望者に実施
 - ＊「早朝学習」の定期的参加者率平成 25 年度 15%をめざし、それを継続する。
 - ・授業規律の徹底(懲戒に結び付けた強力な指導)
 - ＊生徒対象学校教育自己診断で、「授業に集中している」回答（平成 23 年度 60.5%）を平成 25 年度 64%とし、平成 27 年度には 70%にする。

イ 教職経験の浅い教員の教育力向上

- ・「新人育成プロジェクト」による組織的指導、ミドルリーダーによる指導強化
 - ＊「新人育成プロジェクト」による学校教育自己診断に関する取組み状況
 - ＊経験の浅い教員による相互授業見学・相互検証(平成 24 年度一人平均約 4 回)維持

ウ 遅刻・欠席・早退減の取組みの継続

- ・遅刻・欠席・早退減に向けた組織的な取組みの継続
- ＊欠席率・遅刻率・早退率を平成 25 年度以降毎年各 10%ずつ減少させる。

エ 早期からの進路指導の強化（「実践的キャリア教育・職業教育」支援事業推進校として、就職内定率の改善と進路未決定者ゼロをめざす。）

- ・進路指導部の新たな体制を築き、進路指導部と担任団による就職指導の強化を図る。
- ・進学保障の強化
 - ＊工業系生徒の「数学Ⅱ」履修による工業系大学指定校推薦入試での入学実現
- ・平成 24 年度 1 年生からの新たな計画的進路指導改革を 25 年度以降も継続する。
 - ＊進路未決定卒業生を 25 年度は以降毎年 3 %減少させ、平成 27 年度は 10%未満にする。
 - ＊卒業生の就職内定率を 25 年度から毎年 5 %向上させ、27 年度には 93%以上にする。

3 地域社会の一員として、地域に見守られ地域に貢献できる学校

(1) 地域に見守られ、地域とともに成長する学校づくり

- ア 地域の諸機関・事業所との交流・連携
- ・保育園・小学校・中学校・高齢者福祉施設・警察署との交流・連携の継続と強化
 - ・本校体育祭・文化祭への招待
 - ・小学校や高齢者福祉施設との交流の継続
 - ・特に城東区役所との連携強化
 - ＊取組み回数による評価

イ 地域に向けた「成城カルチャー講座」継続・充実と地域への情報発信強化 ・「成城カルチャー講座」の継続・拡大 ＊地域の回覧板による「成城カルチャー講座」の案内文の回覧 3 回を維持 ＊「成城カルチャー講座」受講人数(平成 24 年度は 33 名受講)を毎年 3 名以上増やし、平成 27 年度には 40 名にする ・文化祭・体育祭の地域等への門戸開放を一層進める。 ウ 学校からの発信強化 ・校長が先頭に立った情報発信の継続 ＊校長が中学校(進路指導主事・3 学年主任)訪問を毎年 40 校以上行う(平成 24 年度は 37 校)。 ＊中学校・市民ホール・区民ホール等で開催される高校説明会や本校で実施する学校説明会等でのプレゼンテーションをすべて校長が行なう姿勢を貫く。 ・校門横木製掲示板、「成城高校電子掲示板」、成城高校メールマガジン、ホームページ更新回数活用充実 ＊活用・更新の合計回数(平成 24 年度は合計 285 回)を 310 回とし、27 年度は 320 回にする。 ・地元自治会掲示板、地域の回覧板の活用充実 ＊「成城カルチャー講座」案内以外の活用回数(平成 24 年度は合計 14 回)を 16 回とし、それを維持する。 エ 成城高校の教育活動・現況に関する、地域住民からの聞き取り ・地域住民からの聞き取り調査の実施	
4 平成 26 年度入学者選抜制度改革への対策を進めるとともに、府立高校の改編整備計画のうち、セーフティーネットとしての役割を本校が積極的に果たせるよう、将来に向けた計画的で積極的な取組みを進める (1) 情報・宣伝活動の継続・強化 ・中学校進路指導主事及び塾・予備校関係者対象学校説明会の継続・充実 ・校長が先頭に立った情報・宣伝活動の継続 ＊マスメディアの活用(平成 24 年度はNHKでの報道全国 2 回関西 2 回、毎日新聞 1 回等、マスコミ計 7 回。区役所等での宣伝 2 回)を継続 (2) 平成 26 年度「商業実務系列」実施(2 年生)のための設計 ・「商業」免許保持者を中心に「成城みらいプロジェクト」による設計(カリキュラム精査、資格取得に向けた準備等) (3) クリエイティブ・スクールへの改編後はじめてとなる、電気工事士資格取得(平成 26 年度)をめざした取組み準備 ・2 年生後期からの受験指導開始、1 年生に対する動機づけ (4) 特別進学指導(ハイレベル講習)を 1 年生で継続し、新たに 2 年生でも開始 (5) エンカレッジスクールについての研究を進めるとともに学び直し学習の強化を図る。 (6) 入学者選抜における、定員の各 5 %の校長特別推薦・普通推薦の実施に向けた制度設計を関係部署に要請していく。	

【学校教育自己診断の結果と分析・学校協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析 [平成 25 年 12 月実施分]	学校協議会からの意見
学校協議会での提言を受け、本校では、生徒向け・保護者向けともに選択肢の 1 つとして「わからない」を入れ、5 つの選択肢を設定してきた。また生徒・保護者の回答意欲を低下させないように、昨年度まで質問項目を生徒向け 10 項目、保護者向け 12 項目程度に抑制してきた。 今年度は府教育委員会の指導のもと、アンケート項目を大きく見直し、生徒向け 24 項目、保護者向け 18 項目とした。但し、保護者向けは「わからない」を従前どおり選択肢として残した。生徒用は外部の意見を取り入れ「わからない」を「どちらともいえない」に変更した。 昨年度までは「わからない」と回答する生徒は、全項目において 2 ～ 3 %であったが、今年度は 24 項目すべてにおいて、「どちらともいえない」が約 20 %～50 %と激増してしまった。保護者向けでは、「わからない」はほとんどの項目で 5 %前後であり今年度も従前と変わらなかった。但し、保護者向けは従前どおり各家庭に郵送する形態をとったにも関わらず、回答者数は 1 割減少した。保護者の回答意欲を低下させたと思われる。アンケート項目数は、本校の実態に合わせ昨年度程度にするべきであった。3 ～ 5 割が「どちらともいえない」と回答したため、生徒向けアンケートの信頼度は極めて低くなってしまった。「どちらともいえない」は選択肢として必要かどうか、来年度の実施に向け検討中である。 以下にあげる数値は分母・分子から「どちらともいえない」や「わからない」を除いたものである。 < 学校生活全般について > 「学校に行くのが楽しい」と回答した生徒は 67. 5 % (昨年度は項目なし)、「子どもは学校に行くのを楽しみにしている」と回答した保護者は 76. 3 % (昨年度なし)。来年度は、「楽しい」を「充実している」に変更する。 「成城高校に入学させて良かったと思う」と回答した保護者は 91. 3 % (昨年度 90. 3 %) < 教職員の保護者対応 > 「子どもに関する連絡は適切」「学校に出向いたり電話したとき、教職員の対応は適切」と回答した保護者は、各 91. 3 %、93. 5 % (昨年度とほぼ同じ)で、概ね良好な状態が継続している。 < 学習指導 > 「授業はわかりやすく楽しい」と回答した生徒は 48. 8 % (昨年度「わかりやすい授業が多い」51. 2 %)。＊「わかりやすい」と「楽しい」の 2 重項目質問であり、よくなかった。来年度は「授業はわかりやすい」に戻す。 「授業でわからないことについて、先生に質問しやすい」「教え方に工夫をしている先生が多い」と回答した生徒は各 53. 3 % 63. 8 % (昨年度なし) 「子どもは授業がわかりやすいと言っている」と回答した保護者は 58. 6 % (昨年度なし) 授業改善がいまだ大きな課題であり、各教科で検討させ結果を校長に報告させた。今後改善が期待できる。 「授業は大切だと思う」と回答した生徒は、81. 7 % (昨年度 60. 8 %) で、昨年度に比べ飛躍的に増加したのはうれしい兆候だが原因は未分析である。 「評価の仕方や基準について、事前に示されている」「学習の評価については納得できる」と回答した生徒は各 82. 8、76. 4 % (昨年度なし)	第 1 回 (6/3) ○ 授業を見学して ・ 1 年生の授業を見学したが緊張感があってしっかりと授業を受けていた。 ・ 居眠りをしている生徒が気になった。遅くまでアルバイトをしていることが原因で居眠りをする生徒もいるのではないかとアルバイトの実態調査を行い、アルバイトのあり方を場合によっては P T A と連携して考えてみてはどうか。 ・ 空いている教室の電気が点いていたが、省エネ指導の徹底が必要 ・ 学校の雰囲気良く、非常に落ち着いた雰囲気に見えた。また、学校がきれいで掃除が良く行き届いている印象を受けた。 ○ 新入生 (9 期生) アンケート結果について ・ 質問がおかしい点がある。質問 13 (今悩んでいることはありますか?) に対し、『ない』と答えたのが 71.3 % だが、質問 14 (悩みを相談できそうな先生はいますか?) で『わからない』と答えたのが 53.4 % あるのは、実際に悩みがないのでそのような回答になったのではないかと。質問 13 で『ある』と答えた生徒のみ対象に質問 14 を聞く方がよいのではないかと。 ・ 質問 2 の公立高校の 1 次入試を受検していないと回答した 12 名が、何故、後期で成城高校を受検したかを調査すれば、成城高校に入学する生徒の傾向がわかると思う。成城高校に入学してくる生徒の色々な傾向や情報が隠されているので、調査してみるとよい。 ・ 現在の 9 期生における不登校生徒の現状を聞きたい。 校長・・・29 %が中学校までに不登校を経験している。29 名中、不登校状態が現在も続いている生徒は 2 名 ○ 平成 25 年度 学校経営計画について ・ 取り組み計画の中で、発達障がい等のサポートの支援体制が素晴らしい。特にピア・サポート体制がしっかりしていくよう期待している。中学校では保健委員にピア・サポートの活動を行わせている。また、学級担任にピア・サポート体制の研修を行っており、新任教員には研修会への参加を促している。小・中学校では教育委員会が非常に力を入れて行っている。 ・ 年々、受検倍率が上がってきて入学してくる生徒の状態が良くなってきている。しかし、それによって学校が考えている中期的目標から徐々にはずれてくるのではない。支援が必要な生徒を積極的に受け入れる方針も理解できるが高倍率を突破した学力の高い生徒達のニーズも併せて考えて行く必要がある。 第 2 回 (10/24) ○ 登校遅刻の改善について (遅刻回数の多い生徒全員を対象に実施したアンケートに基づいて、遅刻を減らす具体的方策についての協議) ・ 生活指導部が学期初め等定期的にキャンペーンで遅刻指導を実施 ・ 正門付近に遠くからでも見える時計を設置 ・ 生徒会が主体となって遅刻を減らすような取り組みを行う。 ・ 遅刻をよくしていた子どもをもった親の意見として「本人の意思次第。生活のリズムを作る、家庭の協力も必要」

府立成城高等学校

「高校入学以前に比べ、子どもさんの学習習慣は良くなった」と回答した保護者は 61.0%(昨年度 68.3%)、中学校時代から学習習慣のある生徒が増加してきている結果であると思われる。 ＜進路指導＞ 「自分の将来について考える機会がある」「卒業後の進路を決めている」と回答した生徒は各 77.6%、72.4%(昨年度「卒業後の進路を決めている」は 34.3%、「卒業後の進路に、成城高校の授業は役に立つ」67.3%)と、進路を決めている生徒が倍増したが、その原因は未分析である。 「学校は将来の進路や職業等について適切な指導を行っている」と回答した保護者は 85.2%(昨年度はなし)。一定の成果は出ているが、現在進めている進路指導体制充実を急ぐ。 ＜生徒指導等＞ 「学校では、生活規律や学習規律などの基本的習慣の確立に力を入れている」「社会のルールについて学ぶ機会がある」「学校生活についての先生の指導は納得できる」と回答した生徒は、各 76.8、63.5、38.7%で、生徒指導について生徒が十分には納得していない状況はあるが、他方、「高校入学以前に比べ、子どもの生活習慣が良くなった」「高校入学以前に比べ、子どもの出席状況は良くなった」「学校は子どもさんに社会ルールを守る態度を育てようとしている」と回答した保護者は、各 72.5(昨年度 66.3%)、85.9(昨年度 81.6%)、92.9%あり、確実に本校の取り組みは成果をあげている。今後、生徒指導ルールに緩急をつけるが、基本方針は変更しない。 ＜友人関係＞ 「学校に心を開いて話せる友達がいる」と回答した生徒は 80.3%(昨年度 70.8%)で、友人関係を作ることのできる体制が整いつつあると思われる。ピア・サポート体制を強化する。 ＜情報発信＞ 「学校に出向いたり電話した時、知りたい情報が得られた」「本校から教育活動の内容について十分に情報発信されている」「(メルマガ登録者のみ)本校からのメルマガジンは適切だ」と回答している保護者は各 87.5(昨年度 86.5)、80.0(昨年度なし)、88.9%(昨年度 82.8%)で向上しているが、学校新聞「成城」や、学級通信等の充実を進めることで情報発信を一層 PP 強化する。	・実習系の科目の多い本校では遅刻・欠席は重大問題であり、短期的には教員のの努力で減らしていき、それ以上の改善がなければ長期的に生徒の生活習慣改善を家庭とともに図っていくことを考えたらよい。 ○ 学校教育自己診断結果について（特に、「どちらともいえない」という生徒の回答の割合が高すぎるのが議論の中心となった。） ・質問項目が多すぎると回答しようとする意欲をそぐ。 ・全体をつかみたいのか、原因を探りたいのか、求めたいデータによって設問を調整すべき ・その年度の教育的課題を捉え、工夫を凝らしたアンケートを実施すべき ○ 地域に対して学校ができること、地域から学校にできることについて ・地域の人には学校に入るのは敷居が高い。その敷居を下げるためにも学校が地域協議会などに参加すべきだ。(すでに社会福祉協議会や地域活性化協議会には参加しているが、より高いレベルで) ・企業が社会貢献をしたがっている。地域だけでなくそういった企業を活用するのも一つの手段 ・震災をきっかけに離れた場所の地域にも貢献できたという事例もあり、成城高校も離れた地域での貢献ができるのではないか。 ・城東区諏訪には独居の高齢者が多いので、その方たちに対する生きがい作りが地域貢献の最たるものになる。 第 3 回（1/28） ○ 平成 25 年度学校教育自己診断結果の再協議 ・「授業がわかりやすく楽しい」の生徒の評価が低いことについて、「わかりやすいか」「難しすぎるか」についてに限定した科目別アンケートを実施する必要がある。 ・このアンケートの信頼性については信頼性が高い。それは、「先生は生徒の秘密を守ってくれる」という質問項目は全く同じものが 2 つあるが、2 つの質問に対して同じ回答分布になっていることから明らかである。 ・「学校行事等に参加したことがありますか」との保護者向けアンケートに、「わからない」という選択肢があるのは、不合理である。同様に保護者用の選択肢の中に「よいと思う」があるが、この回答では合理性を欠く。こういった項目の回答の信頼性は低い。もっと精査してアンケートは実施すべきで、これらの項目のような信頼性の低いデータは集計しないでよい。 ○ 学校経営計画・自己評価について (平成 25 年度のものとは平成 26 年度のものとを比較しながら協議) ・学び直しの取り組みや停学減・遅刻減で授業にきちんと参加できる生徒が増加し、成績不振者が減少したために、中退者の大幅減少を達成できつつあると思う。これらの取り組みを一層進めてもらいたい。 ・生活指導と学習指導は学校の 2 本柱であり、成城高校では、生活指導は成果をあげてきているので、次は授業改善に一層も取り組強化が必要である。 ・生徒の発表や意見交換、グループ学習などで成果を上げている学校もある。 ・中学校は習熟度別学習のための人員配置があり、2 クラス 3 展開授業も行っている。成城高校でも検討してみるべき。 ・学習の基礎ができていないと思われる。多くの子どもたちが、本を読まないため言語力が低下している。レポートや説明をさせる取り組みを進めてみるとよい。 ・昔は専門性を高めることで人間形成できたが今は生徒の質が変わってきている。教職経験の短い教員の育成に力点をおくべきだ。 ・成城高校は、新聞やテレビを非常に有効に使って学校の様子を発信している。学校全体が変わりつつあることを生徒が実感できていると思うので、マスメディアの活用を継続するとよい。 ・修学旅行や水耕栽培等多くの取り組みが新聞に掲載されたが、その後の取り組みを広げていくために、今後は文化祭での発表等への取り組みも考えてみて欲しい。 ・中学生に選ばれる高校は、①通いやすい②安心して暮らせる③話題性(マスコミ、懸垂幕、部活動)である。成城高校はこれらの条件を満たしている。 ・早朝学習を続けるとよい。また、自分の子どもは成城高校に入り毎日朝からきちんと登校するようになった。その変わりように、近所の人たちも注目している。強力な遅刻指導等は是非継続すべきである。 ・世間一般に、就職よりも進学の方が優れている意識があるが、大卒でも就職に苦しんでいる。成城高校では、学力の高い生徒も就職しており、進学する生徒が優れている、という見方は少ないようだ。 ・学び直しでレベル分けがあっても、優越感や劣等感なく課題の達成感に満足しているように見えて非常に良いと思う。
---	---

3 本年度の取組内容及び自己評価

中 期 的 目 標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
1 セ イ フ テ ィ ー ネ ッ ト と し て、 外 部 か ら 見 て わ か り や す い コ ン セ プ ト を も っ た 学 校	(1)生徒が自律し安心して暮らすことのできる学校づくり ア 個々の生徒に応じたきめ細かな指導	ア・新学年当初早期の全生徒・保護者面談 ・新入生に関する出身中学校との早期の連携強化 ・教育相談機能の充実（個別「サポートチーム」の充実） ・障がいのある生徒について可能な限りの支援を組織的に行う。 ・特に新入生については、各クラスにピア・サポーターとして生徒1～2名を任命し、担任の指導のもと、発達障がい等の障がいのある生徒や学力の到達度の低い生徒に対する支援を行わせる。	ア・5月中旬までの全生徒面談 100%完了目標(長期欠席者は家庭訪問)(平成24年度4月末までで90%) ・5月下旬までに保護者面談 90%完了(来校不能の保護者は家庭訪問)とし(平成24年度75%) ・5月末までの出身中学訪問100%(平成24年度4月末85%、8月末100%) ・サポートチームの充実等による、配慮を要する生徒に対する柔軟な成績評価4名(平成24年度3名) ・障がいのある生徒・保護者の関取りによる支援に関する満足度90% 保護者対象学校教育自己診断で学校に対する満足度91.3%(平成24年度90.3%、「わからない」除す) ・ピア・サポーター設置状況(6クラス中4クラスをめざす)、具体的な支援状況	ア・5月中旬までの全生徒面談 100%完了(長期欠席者は家庭訪問・電話連絡)(○) ・5月下旬までに保護者面談ほぼ100%完了(来校不能の保護者は家庭訪問・電話連絡)(○) ・5月末までの出身中学訪問約70%(8月末100%)(△) *4月が多用な時期であるため中学校側から訪問を断られる場合が多かった。26年度は入学者2名以内の中学校訪問は5月以降に実施する。 ・サポートチームの充実等による、配慮を要する生徒に対する柔軟な成績評価3名(△) *入学者の傾向に変化が生じており、26年度以降は成績上の配慮を要する生徒は減少の見込み ・障がいのある生徒・保護者からの関取り未実施 保護者対象学校教育自己診断で学校に対する満足度91.3%(○、但し、「わからない」を母数から除す) ・ピア・サポーターは1年生全体で3名のみ。生徒支援を行っているが、教員中心の状況である。(×) *26年度は組織的取り組みを強化する。
	イ いかなるいじめも決して許さない・見逃さない指導と、毅然としたかつ生徒の実態に即した生徒指導	イ・厳格で公平な生徒指導の一層の充実とともに、生徒の実態に即した生徒指導内規緩和と運用上の緩和を図る。 ・不登校・いじめられ経験をもつ生徒が登校改善できるよう図る。	イ・懲戒人数と総停学実数前年度比40%減(平成24年度前年度比17.7%減) ・不登校・いじめられ経験をもつ新入生の登校改善(平成24年度84%)維持 生徒対象学校教育自己診断で、学校に対する満足度65%(平成24年度60.7%、無効回答除す)	イ・前年度同時期比懲戒人数23.0%減少(△)、総停学日数63.6%減少(◎) *事前周知の徹底、ルールの見直しにより26年度は停学人数2割減・日数1割減を図る。 ・不登校・いじめられ経験をもつ新入生の登校改善86%(◎) 生徒対象学校教育自己診断で、学校に対する満足度67.5%(◎、但し、「どちらでもない」を母数から除す) *部活動の活性化、授業の見直しなどにより、26年度は70.5%にする。
	ウ 部活動の活性化	ウ・入部を促す取組みの継続と強化 ・重点部活動の強化 ・耐震工事による運動部の衰退防止のため、グラウンド使用部活動の学校外での活動を保障できるよう、自助努力に努める。 ・国際交流同好会の部昇格。国際交流プロジェクトを新たに組織し、同プロジェクトを中心に、韓国セヒョン高校とのインターネット会議等による交流実施	ウ・部活動加入率55%(平成24年度51%) ・写真芸術部の全国大会レベルコンクール優勝回数(平成24年度3回)と工学研究部の製作取組み(平成24年度3種類)維持 ダンス部発表回数9回(平成23年度8回)。ダンス部・工学研究部の学校説明会での紹介・発表(平成24年度4回)維持 ・学校外での活動保障状況による。 ・国際交流同好会の部昇格及び国際交流プロジェクト創設とインターネット会議等による交流2回	ウ・部活動加入率52.6%(△) ・写真芸術部の全国大会レベルコンクール優勝回数3回(○)、工学研究部の製作取組み3種類(○) *26年度は6月からの耐震工事(数年間はグラウンド面積6割減少予定)を受け、グラウンド使用部活動の活動場所確保を図る。部活動紹介の充実等により加入率を悪化させない。 ダンス部発表回数11回(○)、女子ダンス部員の2割増加を図る。 ダンス部・工学研究部の学校説明会での紹介・発表6回(◎) ・耐震工事なし ・国際交流同好会の部昇格及び国際交流プロジェクト創設達成、インターネット会議等による交流5回(◎)、姉妹校との相互派遣実施、またその生徒向け・保護者向け報告会実施、「使える英語プロジェクト」(第2外国語・韓国語)での生徒発表予定 *中退率を26年度は1%以上減少させる。 エ・教職員・生徒による緑化は進んだが、区役所、地域住民・地域の小・中学校等の協力は得ていない(×) *26年度は耐震工事実施により緑化推進強化は困難
	エ 校内環境整備	エ・区役所、地域住民・地域の小・中学校等の協力を得ながら緑化推進を行なう。	エ・緑化状況	

府立成城高等学校

2 生徒が将来に展望をもてる教育を進める学校	(1) 学力の充実と希望進路の実現 ア 基礎基本の定着 イ 教職経験の浅い教員の教育力向上 ウ 遅刻・欠席・早退減の取組みの継続 エ 早期からの進路指導の強化（「実践的キャリア教育・職業教育」支援事業推進校として、就職内定率の改善と進路未決定者ゼロをめざす。）	ア・1年生「産業社会と人間」を活用した「学び直し」指導の継続と、「算数・数学の学び直し」の継続及び他教科への拡大、2年生でも実施。月～金の「早朝学習」を1年生希望者に実施 ・授業規律の徹底(懲戒に結び付けた強力な指導) イ・「新人育成プロジェクト」の充実、授業見学・観察の継続 ・「新人育成プロジェクト」による学校教育自己診断に関する取組み ・ミドルリーダーによる組織的指導 ・タブレット端末を使った授業力向上 ウ・遅刻・欠席・早退減に向けた組織的な取組み継続 エ・進路指導部の新たな体制を築き、進路指導部と担任団による就職指導の強化を図る。 ・進学保障の強化 ・平成 24 年度 1 年生からの新たな計画的進路指導改革継続 ・電気工事士 26 年度 3 名合格に向けた準備開始	ア・「産業社会と人間」での「学び直し」指導の実施状況及び他教科での実施状況、2年生の状況 「早朝学習」の定期的参加者率 15% ・生徒対象学校教育自己診断で、「授業に集中している」回答 64%（平成 23 年度 60.5%） イ・自己診断取組み状況経験の浅い教員による相互授業見学・相互検証維持(平成 24 年度一人平均約 4 回)。 ウ・欠席率・遅刻率・早退率各 10%減少 エ・進路指導体制刷新状況 ・工業系生徒の「数学Ⅱ」履修による工業系大学指定校推薦入試での入学状況 ・進路未決定卒業生 3 %減少、就職内定率 5 %向上 ・準備状況	ア・「産業社会と人間」での「学び直し」指導の実施状況は大きな成果をあげ、校外からも注目を集めている(◎) 2 年生では「総合的な学習の時間」に国語を中心に実施(○) 「早朝学習」の定期的参加者率 20%(◎) ・生徒対象学校教育自己診断で、「授業に集中している」を変更したため、それに近い質問項目 5 つの平均で回答 60.5% (△) イ・自己診断取組み状況良好（○） 経験の浅い教員による相互授業見学・相互検証 3 回程度(△) * 26 年度は相互授業見学・相互検証の制度化する。 ウ・欠席率 21.7%減(◎)、遅刻率 39.9%減(◎)、早退率 24.1%減(◎) * 遅刻指導に新たな制度を導入することで、出席状況が改善した。26 年度はそれを拡大し遅刻率 3 割減を図るが、同時に、欠席率・早退率は悪化させない。 エ・進路指導体制刷新途中(△) ・工業系大学指定校推薦入試受験者なし、大工大に指定校以外で 1 名合格(本校初)、センター入試受験者が 78%を得点(本校初) ・進路未決定卒業生 4 %減少(◎)、就職内定率 9 %向上(◎) * 3 年生で、新たに進学希望者の中の学ぶ意欲の高い生徒による学級編成を行うなどにより、進路未決定率 1 %減を図る。 また、指定校推薦入試以外での大学合格者 2 割増、国公立大、難易度の高い私大の合格をめざす。 ・電気工事士はすでに 25 年度に 2 名合格(◎) * 受験準備を早期から行わせる。
3 地域社会の一員として、地域に見守られ地域に貢献できる学校	(1) 地域に見守られ、地域とともに成長する学校づくり ア 地域の諸機関・事業所との交流・連携 イ 地域に向けた「成城カルチャー講座」継続・充実と地域への情報発信強化 ウ 学校からの発信強化 エ 成城高校の教育活動・現況に関する、地域住民からの聞き取り	ア・保育園・小学校・中学校・高齢者福祉施設・警察署との交流・連携の継続と強化 ・本校体育祭・文化祭への招待 ・小学校や高齢者福祉施設との交流の継続 ・特に城東区役所との連携強化 イ・「成城カルチャー講座」の継続・拡大 ウ・校長が先頭に立った情報発信の継続 ・文化祭・体育祭の地域等への門戸開放を一層進める。 ・校門横木製掲示板、「成城高校電子掲示板」、成城高校メールマガジン、ホームページの活用充実 ・地元自治会掲示板、地域の回覧板の活用充実 エ・城東区諏訪地域活動協議会の構成員からの聞き取り調査	ア・取組み回数による評価 イ・地域の回覧板による「成城カルチャー講座」案内文の回覧回数(平成 24 年度 3 回)維持 「成城カルチャー講座」受講人数 36 名(平成 24 年度 33 名受講) ウ・校長による中学校(進路指導主事・3 学年主任)訪問 40 校(平成 24 年度 37 校)。高校説明会や学校説明会等におけるプレゼンテーションでの校長の取組み状況 ・文化祭・体育祭来場者数 ・活用及び更新の合計回数 310 回(平成 24 年度は合計 285 回) ・「成城カルチャー講座」案内以外の活用回数 16 回(平成 24 年度は合計 14 回) エ・構成員(35 名)の半数以上からの聞き取り調査の実施	ア・太陽光発電を使った LED による水耕栽培の生産物の保育園・高齢者福祉施設・地元自治会への配布、小学校の体験実習、小・中学校への出前授業、城東区役所への協力 5 回等多数(◎) イ・地域の回覧板による「成城カルチャー講座」案内文の回覧 4 回(○) 「成城カルチャー講座」受講人数のべ 70 名(◎) ウ・校長による中学校(進路指導主事・3 学年主任)訪問 35 校(△)、地域での高校説明会や学校説明会等におけるプレゼンテーション(約 20 回)をすべて校長が行った。(○) * 26 年度は校長による訪問を 40 校とする。 また、学校説明会実施形態の充実を図る。 ・文化祭・体育祭来場者合計約 530 名 ・活用及び更新の合計回数 350 回見込(◎) * 校門横木製掲示板、「成城高校電子掲示板」、成城高校メールマガジン、ホームページ更新、地元自治会掲示板・地域の回覧板の活用回数を 26 年度は合計 400 回にする。 * 学校新聞「成城」の定期的発行(年間 9 回)を進める。 ・「成城カルチャー講座」案内以外の活用回数 14 回(△) エ・構成員(35 名)の半数以上からの聞き取り調査未実施